

## 北垣郁雄教授の退職を祝す

くらしき作陽大学学長／広島大学名誉教授

有本 章

この度、北垣教授が退職されるのに際してお祝詞を述べる機会を頂戴しましたので、私がセンター長としてご一緒した当時は回想しつつその一端を述べさせていただきたいと存じます。

第1に、教授として先生をお迎えしたことが思い出されます。北垣教授は、東京工業大学工学部出身の経歴が示すように、センターのスタッフの中では数少ない理系畑の研究者であります。その時は、理学部出身の関正夫先生の後任人事とはいえ、特に理系畑からお迎えすると決めた訳ではなかったものの、結果的にはそこに帰着したいきさつがあります。丁度、大学院拡充のため設置審をパスさせる必要があり、それとの関係で④教授が必要でありました。公募で応募された候補者の中で、センターには北垣氏が何者かを誰も存じ上げず、彼の指導教官の坂元昂先生に問い合わせ、立派な方だとお墨付きを頂戴して採用した思い出があります。この時効的な秘話には、センターの将来を担う人材の任用には慎重を期し、特にデスクワークばかりではなく、チームワークができるか否かの詮索が重要であったことが反映されていると言ってよろしいかと存じます。

第2に、授業開発室の整備のことが思い出されます。関先生の後釜として来てもらったので、担当講座は大学教育方法であったのですが、とりわけ授業開発のできる人物を求めました。当時、授業開発は大学教育の中核に位置づくにもかかわらず、全国的にほとんど制度化されていない状態にあるとの認識を持っていましたので、適任者をぜひ探すことと全国の大学に先駆けて授業開発室に先行投資して整備を急ぐことを最重要課題としました。その観点から専門家を探しましたものの全国的に専門家は見当たらず探しあぐねたため、結局、時間的余裕もないことも手伝って、正真正銘の専門家とは言えないとしても、工学からのユニークな教授論が期待できるのではないかと可能性を秘めた潜在力を信じて任用に踏み切った覚えがあります。北垣氏にはそのような興望を担って着任していただき、爾来、周知のとおり教育方法の研究や共同研究はもとより、専攻長などの仕事や院生の指導などセンターの組織的發展に重責を果たし存在感を示されました。

第3に、第1と関連しますが、同氏は異色の高等教育研究者であると言えるのではないのでしょうか。センターの高等教育研究者の学問的出自は種々ですが、創設時から概して哲学、教育社会学、比較教育学、教育史、文化人類学など文系専門分野に偏重するきらいがありました。その中で北垣教授は工学が専門の理系でありますから、その意味ではマイノリティに属すると言っても過言ではないでしょう。任用時には、上に述べた力学が作用したとはいえ、理系を任用したのは偶然の所産であったことを想起すれば、後知恵的に言って、彼の存在は専門分野間のバランスをとる点では貴重であったと言わなければなりませんし、センターの学問的生産性に好影響を帰結したのではないかと考えられます。

第4に、それと関連することですが、北垣教授は、センターの良識派であったのではないかと回

願しています。学問分野が少数派であるが故にそのようなスタンスの形成を招来したか否かは明確に説明できないとしても、教授会の意見が対立して決着がつかない場合などに、是々非々の判断を的確にすることのできる良識派であったように思います。加えて、きわめて真面目なお人柄であり、何かと積極的に研鑽されているとの印象があります。センターでは国際会議など英語を使う機会が多い状況がありましたが、その中で英語会話の力をつけないといけないと日々努力されていまして、外国の学会に積極的に参加されて頻繁に発表されるなど真摯に努力する姿勢は、センターの中でも出色であると密かに感心していました。教授は若い人々の手本たるべしと考える私などは朝から晩まで研究室に出て精勤し、プレゼンスを示すことを密かにモットーとしていましたが、北垣教授も精勤派でありました。

第5に、共編著を編纂した経験に触れておきます。北垣先生とは、山本先生とは違って、外国へ同道した経験もなく、世間話に花を咲かせた経験も乏しいのですが、共同で仕事をする機会がありました。何本かの学会発表や論文は北垣教授との共著になっているものがあるのですが、それは私の貢献度は皆無に近く、北垣論文に共同させていただいた類のものであります。共同で編纂した『大学力』なる書物も、編集の大半は北垣教授に負うものでありまして、その際に示された人々を動員するカリスマ性というか、彼の人脈や組織力には感服しました。お陰様で全国の多くの研究者に協力していただき、内容的に楽しい書物が出来上がりました。

第6に、某大学へ推薦したことが記憶にあります。広島に単身赴任であった北垣教授は、何かとご苦労があったと拝察しますし、早く東京へ帰りたいと所望されていました。あるとき東京方面の某大学への推薦を依頼されたことがあり、センターから離脱されると困ると思いながら、固い決意でしたのでお引き受けしたことがあります。結果は幸か不幸か上首尾に至りませんでした。当時は、少し体調を崩されていたようにも拝見しましたので、無理をされていたと思いますし、気の毒でありましたが、センターにとって残留は有難いことであったに違いないと思います。

第7に、TVに出演されていたことも記憶にあります。と申しても、広島のテレビ放送に持ち番組があって、頻繁に出演されていると仄聞したのみで、実際に映像を拝見したのではない私には番組の内容を批評する資格はありません。けれども彼にはそのような一面もあるのかと驚き、専門以外の研究生活を結構楽しまれていると拝察した次第であります。

以上、北垣先生とセンターで一緒に過ごした期間は、それほど長くはないのですが、学ぶべきことや感服することが多々あったと回顧しながら、思い出を多少書かせていただきました。思わぬ独断や偏見があればご容赦ください。この度、大任を果たされて無事退職を迎えられることに対して、先生をお招きした張本人の一人として、心から感謝の意を表しますとともに、今後ともお元気で幸福な人生を送られますよう祈念申し上げます。